

一 如是二字の事

如是の二字を約教の下に釈する時、^{もんく}文句の一に云はく「又一時に^{せん}四箭を接して地に^だ墮せしめざるも、未だ敢へて^{はや}捷しと称せず。^{どんろ}鈍驢に^{むちう}策ちて^{はべつ}跛鼈を驅るも、尚一を得ず。何に況んや四をや」と。記の一に云はく「大經に云はく、迦葉菩薩問うて云はく、何なるを智者念々の滅を觀ずと云ふ。仏の^{のたま}言はく、譬へば四人皆射術を善くし、^{あつ}聚まりて一処に在り、^{おのおの}各一方を射るに念言すらく、我等は四の^や箭、俱に射、俱に^お墮つと。復人有りて念ずらく、其の未だ墮ちざるに及んで、我能く一時に手を以て接取せんといふが如し。仏の言はく、^{しょうしつき}捷疾鬼は復是の人よりも速やし。是くの如く^{ひぎょうき}飛行鬼・四天王・日月神・^{けんしつてん}堅疾天は^{てんでん}展転して箭よりも^{はや}疾く、無常は此に過ぎたり」と。此の本末の心は他師此の經の如是に付き釈を設くと云へども、更に法華經の理に深く叶はざるなり。一二だにも義理を尽くさざるなり。況んや因縁をや、何に況んや約教・觀心の四をやと破し玉へり。所詮法華經は^{そくしつとんじょう}速疾頓成を以て本とす。我等衆生の無常のはやき事は捷疾鬼よりもはやし。爰を以て出づる息は入る息を待たず。此の經の如是は爾前經の如是に勝れて^{ここ}超八の如是なり。超八^{だいご}醍醐の如是とは速疾頓成の故なり。爰を以て妙樂大師云はく「若し超八の如是に非ずんば^{いづく}安んぞ此の經の所聞と為さん」と。